

## 最上地区教育懇談会の概要

【日時】 令和7年10月20日（月）13:30～15:10

（教育委員の主な発言内容）

◇ 学力向上に向けては、子ども達の学習の動機付けが最も重要なことであるとする。例えば、子ども達が世界的に活躍している研究者を見て、自分もあのような人になりたいという気持ちやあこがれを持つことにより、学習に取り組む動機付けになるのではないかと考える。学習のやり方などの方法論だけではなく、将来このようになりたいという、子ども達の動機付けに焦点を当てて取り組んでいくべきと考える。（小関委員）

◇ 学んだことを定着させるには、学校における学習だけでなく、家庭学習の時間を十分に確保することが重要と考える。それには、教職員だけでなく、保護者や地域の大人が一体となって子ども達の学習環境づくりに関わっていくことが重要ではないかと考える。

また、ICTにおいては、これを活用することに注力するのではなく、ノートに自分で書くことで学習が進むのであれば、ICTを活用しない学習であってもよいのではないかと考える。子ども達一人一人に合う個別最適なやり方で学習に取り組んでいくことが大切であるとする。（工藤委員）

◇ 学力向上に向けて重要なことは、わからない部分を認識し、それを解消する手立てを相談する仲間がいることと考える。子ども達同士でわからないところをお互いに聞き、教え合う環境を作ることで、教わる側はわからない部分を解決できたという満足感を、教える側は教えることができたという成功体験を持つことができ、それが子ども達の能動的な学習に結び付き、全体の学力向上につながるのではないかと考える。

また、最上地区にもある小規模校の特長として、個人の努力が学校全体の結果に反映されやすいことがあると考える。自分の得点向上が学校全体の得点向上につながることを子ども達に意識付けすることで、小規模校ならではの学力向上につながるのではないかと考える。（和田委員）